④ 江草安彦氏死去

医療、福祉に大きな足跡

「人間尊重の理念の下、医療と福祉の融合に取り組まれた。わが国の誇りだった」

3月13日に88歳で死去した社会福祉法人旭川荘（岡山市北区祇園）の名誉理事長・江草安彦さんの遺影を前に、末光茂理事長はこう追悼の言葉を述べた。

4月に岡山市内で開かれたお別れの会には、県内外の福祉や教育、経済、行政関係者ら約1600人が参列。訪れた人は「痛恨の極みだ」「笑顔を絶やさない人だった」と弔意を表し、障害者福祉分野の先駆者として歴史に大きな足跡を残した故人を悼んだ。

江草さんは1950（昭和25）年、岡山医科大付属医学専門部（現岡山大医学部）を卒業し小児科医になった。医療や福祉に頼ることができない障害児や家族がいることを知り、障害者福祉の道を歩む決意を強くする。

56年の旭川荘創設に参画。翌年、創始者・川崎祐宣初代理事長の下、知的障害児施設、乳児施設を運営する。

67年には中四国地方初の重症心身障害児施設「旭川児童院」の院長に就任した。医療と福祉を融合させ、乳幼児から高齢者まで対象とした幅広いサービスを提供。通所事業や巡回療育相談も始め、在宅障害者の地域福祉向上にも力を注いだ。

「利用者の人生をトータルに考えていた」と末光理事長。障害のあるなしにかかわらず地域で暮らす「ノーマライゼーション」の考えを実践し、障害者が働く会社を立ち上げ、うどん店や施設清掃、マッサージなど知的障害者の仕事を拡大したのに加え、アートギャラリー開設など芸術振興にも尽力した。

後進の育成にも努めた。91年には医療福祉の名を冠した全国初の4年制大学・川崎医療福祉大（倉敷市松島）を開学し、初代学長に就任。中国・上海市の医師や福祉従事者を受け入れ、旭川荘の現場で研修を受けさせるなど、その目は海外へも向けられていた。

多大な功績から80年、山陽新聞賞（社会功労）、95年に三木記念賞、2006年には瑞宝重光章を受けた。今年10月に名誉県民にも選定された。

11月の旭川荘の創立60周年式典への出席を楽しみにしていた江草さん。9月に旭川荘中庭に節目を記念した「悠久の庭」が完成し、万成石製の碑が建立された。中央のレリーフには、川崎祐宣さんと、肢体不自由児施設・旭川療育園名誉園長の堀川龍一さん、江草さんという法人の発展に貢献した3人の姿が描かれている。

故人の顕彰とともに、遺志を継ぎ、新たな一歩を踏み出す決意の表れでもある。

在りし日の江草さん。医療と福祉の融合や人材育成など岡山の社会福祉向上に大きく貢献した＝2007年4月

取材メモ

思い継ぎ努力続けて

旭川荘の創設以来、社会のニーズを見極めながら障害者と共に生きる社会づくりに生涯をささげた江草安彦さん。功績は医療や福祉にとどまらず、教育、経営、国際貢献へと多方面にわたる。まさに「福祉県岡山」の発展を支えてきた人物だ。

本紙が追悼特集紙面に掲載したのは、施設利用者と手をつないで走る青年時代の笑顔の写真。「最も弱い人、最も厳しい状況に置かれている人のそばにいること」を目標とした江草さんの原点を感じる1枚だ。

江草さんの死去は、法人にとって大きな損失には違いない。しかし、思いを受け継ぐ職員や年間1万人を超えるボランティアがいる。「障害者とその家族の幸せ」のために努力を続けてほしい。（平田桂三）

（C）山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。